

《小坡の誕生日》 老舎

## (六) 学校へ行く

もし学校が一年じゅうずっと休みだったら、その一年は時間がとっても楽しくとっても速く過ぎていくだろう。だって、年度末の一か月の休みだってとっても速く過ぎて、もっと遊びたいと思っているのに、新学期が始まってしまう。どうして先生たちは教えるのが好きなんだろう。どうしてあと二、三か月、休みがないんだろう。ひょっとしたら先生たちは遊ぶのが好きじゃないのかもしれない。せめてあと一か月あったらな。今すぐ始まるよりはまだましじゃないか！

シャオポー  
小坡はこう考えてはいたが、決して学校に行くのが嫌だったわけではない。ただ、妹が泣くのが怖くて、父さんが怒るのが怖かっただけなのだ。それ以外に小坡には怖いものはなく、やれないことはない。

学校は始まると思ったら始まるのだ。ほかの遊びをするのと同じように、小坡は楽しく準備をする。父さんの店から虫に喰われて二、三年は売れていない筆を七、八本持ってきた。父さんの店にはいい筆がないが、小坡は毛が抜ける筆がとっても好きだ。字を書きながら毛を引き抜くと、やるが増えて楽しいからだ。大きな銅の墨入れも持ってきた。墨は入れないで、チョークとか小さな乾いたピンロウ、ナツメの種などの宝物を拾ったときはいつでもそれに入れてとっておくためだ。

父さんが新しい教科書を買ってきてくれた。小坡と妹は一冊ずつ手にとって、教科書の中の絵をひととおり見た。妹は「この新しい教科書は絵が少ないから前のほうがいい」と言った。小坡はため息をついて言った。「先生たちは絵がわか

らない。字だけしかわからないんだ。どうしようもないよ！」

いろいろな物はそろったが、カバンが見つからない。小坡<sup>シャオポー</sup>と妹は洗面器の中や陳<sup>チェン</sup>おばさんの枕の下まで、あちこちひっくり返して探したが、ない！ 最後に小坡は猫<sup>アルシー</sup>の二喜に、カバンをみなかったか、と尋ねた。二喜はニャーオと一声鳴<sup>ひとこえ</sup>くや、小坡を庭に連れていった。ははは！ 何とカバンは花が咲いている茂みに隠してあったのだ。拾い上げてみると、綿のかたまりや破れたゴムボール、そのほかこまごまとした物がいっぱい詰まっていた。二喜はこれらのおもちやを置いておくところがなかったので、小坡のカバンを拝借し自分の宝物入れにしていたのだ。小坡が妹にこの話しをすると、二人はそれで二喜のことがもっと好きになった。小坡が言った。父さんがきげんのいい時に、新しいカバンを買ってくれるように頼めるかもしれない。そのときにはこの古いカバンは二喜にあげよう。」妹は「私と彼女と二喜が一人ずつカバンを買って学校に行くのはすごくいいよね」と言った。だが小坡が言った。「学校にはつがいのマウスがいるんだ。もし二喜が行ったら、マウスたちの命がなくなるかもかもしれない！ この問題は時間のあるときにもっと検討しなければならないだろう」

家から学校までは歩いて十数分の道のりだった。学校は朝八時に始まり、兄さん<sup>ダーポー</sup>の大坡は七時半前後には出かける。だが小坡は六時半には家を出る。毎日、妹が大通りに出るところまで小坡送ってきて、それから妹を家まで送り、また妹が大通りに出るところまで見送りに来て、それから妹を家まで送るからだ。このように七、八回往復して、兄さんが用意ができたのを見ると、やっと後ろ髪を引かれる思いで妹を母さんに託した後、兄さんと一緒に学校に行くのだ。

小坡と妹が近所を歩いているとき、南星<sup>ナンシン</sup>、三多<sup>サンドウオ</sup>、そしてマレーシア人の少女たちに出会うこともある。小坡は合点がいかない。どうして南星たちは自分と一緒に学校で勉強しないんだろう。もしみんなと一日じゅう一緒にいられたら、何

て楽しいことだろう。でもだめなんだ。みんなはわざと別々に学校に行くんだ。朝早くと夕方にしか会うことができない。これはまったくおもしろくないことだ。さらによくわからないことがある。みんな生徒なのに、勉強していることが同じではないし、学校への通い方も違う。たとえば南星<sup>ナンシン</sup>の場合は一か月に一日だけ学校に行く。つまり、毎月一日に学費を持って行って先生に渡すと、それからは次の月の一日までずっと学校に行かなくてもいい。南星の通っている学校には校長先生が一人、先生が一人、小使いさんが一人、そして生徒が一人、つまり南星だけしかいないそうだ。校長先生、先生、小使いさん、そして南星が毎月一日に学校に行く。みんながそろそろ小使いさんが鐘を鳴らす。鐘はよく響く。鐘の音が聞こえると南星が学費を校長先生に渡す。小使いさんがまた鐘を鳴らす。鐘はよく響く。すると校長先生と先生がごはんを食べにでいく。二人が行ってしまうと南星が銅の鐘のところに走っていき鐘を鳴らす。鐘はもっとよく響く。ひとしきり思い切り鳴らして家に帰る。南星が入学したとき、国語の教科書の一冊目をもらった。いま三年生になったが、まだ第一冊目の教科書を持っている。南星の両親は言っている。「この世でこんなに教科書代と学用品代のかからないところはない。」だからずっと南星をほかの学校には行かせないのだ。校長先生も先生もとても教育熱心で、たとえ生徒が一人でも教えることをやめようとしなない。シンガポールには学校が多いので募集しても生徒が集まらないのだ。だがそれは先生たちのせいではない。

小坡はとっても南星の学校に行きたかった。しかし父さんが許してくれないばかりか、ついでにこうも言う。「南星の父親はばか者だ！」

マレーシア人の少女二人の学校の通い方も変わっている。二人の学校はマレー人の学校だ。毎日十一時に学校へ行く。学校に着き先生に会うとすぐに家に戻る。二人の学校では、先生が生徒に教えるのではなく生徒が先生に教えるのだそうだ。

二人が受け持っている学科は「食事」で、二人が学校に十一時に行って先生たちに何を食べたらいいか教えてやらないと、先生たちは何を食べていいかわからないで、夜までずっとお腹を空かせていなくてはならないのだ。二人は学校に行き先生に会って、ただ「今日はカレーと青菜炒めです」と言いながら、先生におじぎをする。先生は急いでその料理名を黒板に書く。先生が書き終わるのを待って二人はもう一度おじぎをする。それから手を取り合って家に帰る。小坡はどうしてもこの学校に入りたかった。自分はマレー人の先生に、とってもたくさんのことを教えてやれると思っているからだ。しかし父さんは、なぜかマレー人の学校をばかにしていて、もちろん小坡が入学するのを許してはくれなかった。

インド人の二人の少年は英語で教えられている学校で勉強している。学校には中国人やインド人の子供たちがいた。白い顔で鼻が高く青い目をしているアメリカ人の先生がいて、先生たちはみんな若い女の人だった。小坡はいつも、もし転校するとしたら、必ずあの学校に入ろうと思っていた。いろんな子供たちがいるなんて、何て面白そうなんだろう。それに白い顔、高い鼻、青い目の先生がいて、みんな若い女の人なんだ！　もしぼくがああの学校にいていっしょうけんめい勉強して、先生がぼくを好きになってくれたら、先生たちは仙坡を先生にしてくれるかもしれない。仙坡は青い目じゃないけれど、女の人にはまちがいないんだもの。

二人のインド人の少年の学校の通い方はとても面白い。一日学校に行き一日休む。一人分の学費しか払っていないので、今日兄さんが行けば明日は弟が行くというふうに、交代で学校に行くのだ。青い目の先生たちは二人を見分けることができないから、どちらが来ているのかわからない。定期試験の日がやってくると、兄さんは英語の試験の準備をするし、弟は地理の準備をする。これはとっても便利なことだよ。山のような本を全部覚えられる者なんているもんか。先生たち

だって、国語を教える先生もいれば歌を教える先生もいるじゃないか。一人が何でもはできないってことだろう？ インド人の少年のやりかたはほんとうに合理的だ。それぞれが一部分を受け持つので無駄がないしよく覚えられる。<sup>シャオポー</sup>小坡は考えた。もし自分があの赤い絹の宝物をはおってインド人に変身し、妹にも顔を黒く塗らせとんでも上手にインド人の真似をさせたら、二人で同じ日に学校に行けるじゃないか。いや、やっぱりだめだ！ 自分がこんなふうにするのを父さんは許してくれない。父さんに聞いたら必ずこう言うだろう。「広東人は広東人の学校に行くんだ。そう決まっているんだ！」

小坡は<sup>ナンシン</sup>南星のことはうらやましいが、<sup>サンドゥオ</sup>三多のことはとてもかわいそうだと思っている。三多はまったく学校に行かないのだ。毎日家で、大きなめがねをかけた長いひげの歯の抜けたおじいさんに、一日中読み書きを習っているのだ！ 歌も歌わないし体操もない。いちばんすごいのは、本に絵が一枚も載っていないくて、ぜんぶのページに黒い小さな字がびっしりと詰まっていることだ！ 自分で自分を打倒できる三多だからこの苦しみに耐えられるけれど、他の人だったら、一日に五百回は「打倒〔打ち倒せ〕！」と叫ぶのではないか！ 確かに、三多はみんなの中でいちばん字を知っている。ただ三多が知っているのは本の中の字で、場所が違ってもうだめだ。町の広告や店の看板の字の読み方を聞くと、小さな声で言う。「あの字は本の字と同じ大きさじゃないから、ちょっと自信がないな！」かわいそうな三多！

小坡はほかの者の学校をうらやましいと思っはいるが、それは自分が通っている学校を嫌っているからではない。小坡の二百人以上の生徒がいる。男の子も女の子もいる。先生も十人ぐらいいて、みんな絵を見ないでもすぐに字がわかる。

先生たちはみんな小坡が好きで、小坡も先生たちが好きだ。特に自分のクラスの先生が好きだ。声が大きくてよく通る。それに、教壇で立ったまま眠ることが

できる。先生が眠ると小坡はシャオポーすぐにこっそりと抜け出してちょっと遊びに行く。先生が目を覚まして大きな声で授業をはじめると、小坡はすぐにこっそりと入ってくる。かち合うことは絶対でない。

六時半になった。学校に行くぞ！ カバンを背負った。カバンの中には紙と墨と筆と硯のほかにも、いつでも自由に変身できるあの赤い宝物が詰めこんである。

妹の手を取って門を出た。

「まず南星ナンシンに会いに行こうよ、どうだい？」

「いいよ」

通りを一巡りして、南星のところに行った。

「小坡、学校に行くのかい？」と南星が尋ねた。

「そうだよ、南星は？」

「おれかい？ だってまだ一日ついたちになってないよ」

「ああ！」 小坡は心の中でどれほど南星がうらやましかったことか！ 小坡が言った。「三多サンドウオのところに行こうよ」

「行っちゃだめだ！ 三多はきのう暗誦できなかったので、罰で門のところ立たされたんだ。日に当たって頭から汗がだらだら出ていた。こっそりバナナの葉で帽子を作ってやったんだ。そしたらな、あの年寄りに見つかって、大きなキセルで『バン！』ってやられたんだ。ほら、ちょっと見てくれよ、このたんこぶ！」

ほんとうに、南星の頭頭のてっぺんのてっぺんに、青と紫のあいだの色のたんこぶができていた。

「あれー！」小坡は南星のために義憤を感じた。ちょっと考えて言った。「南星、あの年寄りを打倒しに行こうよ、どうだい？」

「あのキセルはとってもとっても長いんだぞ！ そばに行く前にキセルで『バン！』。頭の上にだ。もう俺は行けないよ」 南星は頭のたんこぶをさすりなが

ら、まったく「蛇に一度噛まれたら三年縄を怖がる（糞に懲りてなますを吹く）」というふうだった。

「まずキセルを盗みに行こう」と小坡<sup>シャオポー</sup>が言った。

「だめだ！ 三多<sup>サンドウオ</sup>が言ったことがある。あの年寄りにはキセルのほかにもステッキを持っていて、常々『ステッキなしの授業など考える必要もない』と言っていた。

「ステッキって何？」

南星<sup>ナンシン</sup>もステッキがどういうものか知らなかった。ただ三多が言っているのを聞いていたので、ステッキという名の物を見たような気になっていたのだ。それでいったいどのようなものかを、あえて説明しようとはしなかった。

「ステッキってどんな物？ お兄ちゃん」と仙坡<sup>センポー</sup>が聞いた。

小坡は目をくるくるさせて「とってもすごい犬みたいなもんだよ、だいたいのところ。人間の足に噛みつくんだ」

「こわい！」仙坡が声をふるわせた。

小坡はあの年寄りのことをばかにはできないことがわかったので、話題を変えるしかなかった。

「インド人のところに行こうよ、ねえ」

「もう学校に行ったよ。たった今ここを通った」南星がこたえた。

「だっていつも一人は家にいるんだろう。一日交替で行ってるんじゃないの？」

「今日は学校で会が開かれていて、お菓子とかアイスクリームとかあるんだ。だから二人とも行っちゃった。『一人が先に行って食べ終わったら二人目が行くんだ』って言ってたよ。そんなふうにして少なくとも十回は交替して行っている。おれの顔が黒くなくて残念だ。黒かったら一緒に行けるのに！ お菓子にアイスクリームだぞ、ああ！」南星はこの時、人生を真から悲しんでいるようだった。

「アイスクリームにお菓子！」小坡と仙坡は同時にくちびるをなめて言った。

少し黙ってから小坡が言った。「マレー人の女の子たちのところに行けば？」

「二人も学校に行ったよ」と、南星はしょんぼりして言った。みんなが学校に行ってしまう、自分が身よりのない「かわいそうな子」になってしまったと感じているようだった。

「学校にもう行っちゃったの。こんなに早く。うそでしょう？」仙坡が言った。

「ほんとうだよ。ぼくが二人をちょっとばかりおんぶしてやったんだもん。あの子たち言ってたよ。先生が一人ベッドから落ちてしまったんだって。どうやってベッドの上に上がればいいのかわからなくて、それで生徒を集めてみんなのアイデアを聞くんだって」

「まあ！」仙坡は、ベッドから落ちて上がり方がわからない先生のことを心配した。

「ベッドをひっくり返して、先生の上にかぶせればいいんじゃないかい。ベッドに上がったりベッドから降りたりする手間が省ける」小坡はいう言って、少し黙った。「でも、どんなベッドなのかが問題だ。藤製のだったらいいけど、鉄のだったら重すぎて息ができなくなっちゃうよ！」

「床の上に寝るのも悪くないよ。ベッドなんかなくていいから」と仙坡が言った。

「そんな先生がいたらとっても面白いな。すぐに、マレー人の学校に行かせてくれるように父さんに頼みに行くよ」南星が言った。

「南星が行くんだったら私も行く。でも、毎日、私をおんぶして行ってくれなきゃだめ」と仙坡が言った。

「いいとも！」南星は仙坡が自分のことをこんなに重く見てくれたのがうれしかった。

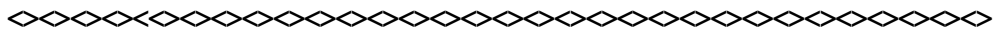
「じゃあ、南星。夕方にね。学校に行かなきゃならないから！」



「早く帰ってこいよな、小坡。もう一回打倒やらなきゃあならないんだから」

ナンシン  
南星は心から頼んだ。

「もちろん！」シャオポー小坡はにっこりした。妹の手を引いて家に送っていった。家に着くと、兄さんはもう学校に行っていた。小坡は大急ぎで学校まで走って行った。



(中国語原文) (六) 上学

要是学校里一年到头老放假，这一年的光阴要过得多么快活，多么迅速；你看，年假一个来月过得有多么快，还没玩耍够呢，又到开学的日子了！不知道先生们为何这样爱教书，为什么不再放两三个月的假，难道他们不喜欢玩耍吗？哪怕再放“一”个月呢，不也比现在就上学强吗？

小坡虽然这么想，可是他并不怕上学。他只怕妹妹哭，怕父亲生气，此外，他什么也不怕，没有他不敢作的事儿。开学就开学呗，也跟做别的游戏一样，他高高兴兴的预备起来。由父亲的铺中拿来七八支虫蚀掉毛，二三年没卖出去的毛笔。父亲那里不是没有好笔，但是小坡专爱用落毛的，因为一边写字，一边摘毛，比较的更热闹一些。还拿来一个大铜墨盒，不为装墨，是为收藏随时捡来的宝贝——粉笔头，小干槟榔，棕枣核儿等等。

父亲给买来了新教科书，他和妹妹一本一本地先把书中图画看了一遍。妹妹说：这些新书不如旧的好，因为图画不那么多了。小坡叹了口气说：先生们不懂看画，只懂看字，又有什么法儿呢！

东西都预备好了，书袋找不到了。小坡和妹妹翻天捣洞地寻觅，连洗脸盆里，陈妈的枕头底下都找到了，没有！最后他问小猫二喜看见了没有，二喜喵了一声，把他领到花园里，哈哈！原来书袋在花丛里藏着呢。拿起一看，里面鼓鼓囊囊的装着些小棉花团，半个破皮球，还有些零七八碎的，原来二

喜没有地方放这些玩意儿，借用小坡的书袋作了百宝囊。他告诉了妹妹这件事，他们于是更加喜爱二喜。小坡说：等父亲高兴的时候，可以请求他给买个新书袋，就把这个旧的送给二喜。妹妹说：简直的她和二喜一人买个书袋，都去上学也不坏。可是小坡说：学校里有一对小白老鼠，要是二喜去了恐怕小鼠们有些性命难保！这个问题似乎应该等有工夫时，再详加讨论。

由家里到学校有十几分钟便走到了。学校是早晨八点钟上课，哥哥大坡总在七点半前后动身上学。可是小坡到六点半就走，因为妹妹每天要送他到街口，然后他再把妹妹送回家，然后她再送他到街口，然后他再把妹妹送回来。如此互送七八趟，看见哥哥预备好了，才恋恋不舍地把妹妹交给母亲，然后同哥哥一齐上学。

有的时候呢，他和妹妹在附近走一遭，去看南星，三多，和马来小姐们。小坡纳闷：为什么南星们不和他在一个学校念书，要是大家成天在一块儿够多么好！不行，大家偏偏分头去上学，只有早晚才能见面，真是件不痛快的事。还更有不可明白的事呢：大家都是学生，可是念的书都不相同，而且上学的方法也不一样。拿南星说吧，他一月只上一天学。那就是说：每月一号，南星拿着学费去交给先生，以后就不用再去，直等到第二月的一号。听说南星所入的学校里，有一位校长，一位教员，一个听差，和一个学生——就是南星。校长，教员，听差，和南星都在每月一号到学校来。大家到齐，听差便去摇铃，摇得很响。一听见铃声南星便把学费交给校长。听差又摇铃，摇得很响，校长便把南星的学费分给先生与听差。听差又摇铃，摇得很响，校长和先生便出去吃饭。他们走后，南星抢过铜铃来摇，摇得更响，痛痛快快地摇过一阵，便回家去。他第一次入学的时候，拿着第一册国语教科书，现在上了三年的学，还是拿着第一册国语。他的父母说：天下再找不出这样省书钱，省笔墨费的地方，所以始终不许南星改入别的学校。校长和先生呢，

也真是热心教育，始终不肯停。新加坡学校太多，招不来学生，那不是他们的过错。小坡很想也入南星所在的学校，但是父亲不但不允所请，还带手儿说：南星的父亲是糊涂虫！

两个马来小姑娘的上学方法就又不同了：她们的是个马来学校。她们是每天午前十一点钟才上学，而且到了学校，见过先生便再回家。听说：她们的学校里不是先生教学生，是学生教先生。她们所担任的课程是“吃饭”。到十一点钟，她们要不到学校去，给先生们出主意吃什么饭，先生们便无论如何想不出主意来，非一直饿到晚上不可！她们到了学校，见了先生，只要说：“今天是咖咧饭和炒青菜。”说着，向先生一鞠躬。先生赶紧把这个菜单写在黑板上。等他写完，她们便再一鞠躬，然后手拉手儿回家去。小坡也颇想入这个学校，因为他可以教给马来先生们许多事情。但是父亲不知为何老藐视马来人，又不准小坡去！

两个小印度是在英文学校念书。学校里有中国小孩，印度小孩等等；还有白脸，高鼻子，蓝眼珠的美国教员，而且教员都是大姑娘。小坡时时想到：我要是换学校啊，一定先入这个英文学校。那里有各样的小孩，多么好玩，况且有白脸，高鼻子，蓝眼珠的教员，而且都是大姑娘！我要是在那里好好念书，先生一喜爱我，也许她们把仙坡请去当教员，仙坡虽然没长着蓝眼珠，但是她反正是姑娘啊！

两个小印度上学的方法也很有趣味：他们是上一天学，休息一天的，因为他们俩交一份儿学费，两个人倒换着上学。今天哥哥去，明天弟弟去。蓝眼珠的先生们认不清他们谁是谁，所以也不知道。到学期考试的时候，哥哥预备英文，弟弟就预备地理，你看这有多么省事！谁能把一大堆书都记住，就是先生们吧，不也是有的教国语，有的教唱歌吗？可见一个人不能什么都会不是？小印度们的办法真有道理，各人抱着一角儿，又省事，又记得清楚。

小坡想：假如他披上他那件红绸子宝贝，变成印度，再叫妹子把脸涂黑，也颇可以学学小印度们，一对一天的上学。唉！不好办！父亲准不许他们这样办！一问父亲，父亲一定又说：“广东人上广东学校，没有别的可说！”

小坡要是羡慕南星们呀，可是他真可怜三多：三多是完全不上学校，每天在家里眼着个戴大眼镜，长胡子，没有牙的糟老头子，念读写作，一天干到晚！没有唱歌，也没有体操！顶厉害的是：书上连一张图画没有，整篇整本密密匝匝的全是小黑字儿！也就是自己能打倒自己的三多，能忍受这个苦处，换个人哪，早一天喊五百多次“打倒”了！不错，三多比谁都认识的字多。但是他只认识书本上的字，一换地方，他便抓瞎了。比如你一问街上的广告，铺户门匾上的字，他便低声说：“这些字和书本上的不一样大，不敢说！”可怜了三多！

小坡虽然羡慕别人的学校，可是他并不是不爱他所入的学校。那里有二百多学生，男女都有。先生也有十来位，都能不看图就认识字。他们都很爱小坡，小坡也很爱他们。小坡尤其爱他本级的主任先生，因为这位先生说话声音宏亮，而且能在讲台上站着睡觉。他一睡，小坡便溜出去玩一会儿。他醒来大声一讲书，小坡便再溜进来，绝对的不相冲突。

六点半了，上学去！背上书袋，袋中除了纸墨笔砚之外，还塞着那块红绸子宝贝，以便随时变化形象。

拉着妹妹走出家门。

“先去看看南星，好不好？”

“好哇。”

绕过一条街，找到了南星。

“上学吗，小坡？”南星问。

“可不是。你呢？”

“我？ 还没到一号呢。”

“噢！”小坡心中多么羡慕南星！“咱们找三多去吧？”

“别去啦！ 三多昨儿没背上书来，在门口儿罚站，脑袋晒得直流油儿。我偷偷的给他用香蕉叶子作了个帽子，好！ 被那个糟老头子看见了，拿起大烟袋，bang! ① 给了我一下子！ 你看看，这个大包！”

果然，南星的头顶上有个大包，颜色介乎青紫之间！

“啊！”小坡很为南星抱不平，想了一会儿，说：“南星，赶明儿咱们都约会好，去把那个糟老头子打倒好不好？”

“他的烟袋长，长，长着呢！你还没走近他身前，他把烟袋一抡，bang! 准打在你的头上！好，我不敢再去！”南星摸着头上的大包，颇有点“一朝被蛇咬，三年怕井绳”的神气。

“先去偷他的烟袋呀！”小坡说。

“不行！ 三多说过：老头子除了大烟袋，还有个手杖呢！ 老头子常念道：没有手杖不用打算教学！”

“手杖？”仙坡不明白。

“唉，手杖？”南星也不知道什么是手杖，只是听三多说惯了，所以老觉得“似乎”看见过这种名叫手杖的东西。——不敢说一定是怎么样儿。

“什么是手杖呢？ 二哥！”仙坡问小坡。

小坡翻了翻眼珠：“大概是个顶厉害的小狗，专咬人们的腿肚子！”

“那真可怕！”仙坡颤着声儿说。

小坡知道这个老头子有些不好惹，他只好说些别的：“咱们找小印度去，怎样？”

“已经上学了，刚才从这儿过去的。”南星回答。

“反正他们总有一个在家呀，他们不是一对一天轮着班上学吗？”小坡问。

“今天他们学校里开会，有点心，有冰激凌吃。他们所以全去了。他们说：一个先进去吃，吃完了出来换第二个。这样来回替换，他们至少要换十来回！可惜，我的脸不黑，不然，我也和他们一块去了！点心，冰激凌！哼！”南星此刻对于生命似乎颇抱悲观。

“冰激凌！点心！”小坡、仙坡一齐舔着嘴唇说。

待了半天，小坡说：“去看看马来小姑娘们吧？”

“她们也上学了！”南星丧气颓声的说，似乎大家一上学，他简直成了个无依无靠的“小可怜儿”啦。

“也上学啦？这么早？我不信！”仙坡说。

“真的！我还背了她们一程呢！她们说，有一位先生今天早晨由床上掉下来了，不知道怎么再上去好，所以来传集学生们，大家想个好主意。”

“噢！”仙坡很替这位掉下床来而不知怎么再上去好的先生发愁。

“把床翻过来，盖在他身上，就不错，省得上床下床怪麻烦的。”小坡说，待了一会儿：“可是，那要看是什么床啦：藤床呢还可以，要是铁床可未免有点压得慌！”

“其实在地板上睡也不坏，可以不要床。”仙坡说。

“有这样的老师，真是好玩！我赶明儿告诉父亲，也把我送到马来学校去念书，”南星说。

“你要去，我也去。可是你得天天背着我上学！”仙坡说。

“可以！”南星很高兴仙坡这样重视他。

“好啦，南星，晚上见！我可得上学啦！”小坡说。

“早点回来呀！小坡！咱们还得打一回呀！”南星很诚恳的央求。

“一定！”小坡笑了笑，拉着妹妹把她送回家去。到了家门，哥哥已经走了，他忙着扯开大步，跑向学校去。

① Bang……原文は「口偏に邦」の字。

(『中国名家經典童話—老舍選集』 同心出版社，北京，2009，pp. 65-73, .)

